特集

義農祭

享保の大飢饉（ききん）のとき、後世に麦種を残すため自らの命を犠牲にして亡くなった「義農作兵衛」。毎年４月23日には、義農作兵衛をしのぶため、「義農祭」が開催されています。

恒例となっている義農祭ですが、今年は、例年と少し雰囲気が違っていました。その背景には何があったのでしょうか―。今回の特集で迫ります。

100年以上続く祭り

義農祭は、100年以上前から行われている祭りです。「義農会」が組織された大正２（1913）年には、同会が義農精神を広めようと義農作兵衛をたたえる碑を建立したほか、祭りも盛大に行ったという記録が残っています。そして、大正13年には伊予実業学校生（現伊予農業高等学校）、昭和になると松山農業生（現愛大附属農業高等学校）も加わり、相撲大会が開かれるなど、年々多くの人が参加。町の偉人をしのんできました（「松前町誌」より）。

大正の初め、義農祭は９月23日に開かれていた。写真は、義農祭での相撲大会

時代の変化で変わるお祭り

しかし、近年になり、時代の変化や、限られた人員や予算の中で開催が求められたことなどから、規模は縮小し、祭りの内容も固定。子どもたちも、授業などの兼ね合いから、全地区から参加することは難しい状況でした。

今年は新しい試みも

このような状況の中、今年の義農祭には、岡田・北伊予地区の中学生をはじめ、近隣の高校生も参加。内容も、義農作兵衛が残した「麦種」にちなみ、麦を使った商品を販売するブースや、義農作兵衛をしのんだ群読など、さまざまなイベントが行われました。さらに、初開催となった夜のイベントでは、行燈（あんどん）で「麦の穂」が映し出され、今年の祭りは例年とは違ったにぎわいを見せていました。

「今年は、何があるんだろう」

今まで参加したことがある人も、初めて参加した人も、一体となって義農作兵衛をしのび、祭りを楽しんでいました。

義農作兵衛の像

「中高生が多い？」

義農祭がいつもと違う

「行燈もするの？」

1＿まずはお参り。境内へ進んでいく子どもたち　2＿「昔、麦種を守ってくれたんだよ」先生から義農作兵衛について教えてもらう　3＿偉人をしのび、献花　4＿「みそ汁はいかがですか?」中高生が麦味噌をPR　5＿多くの人でにぎわう会場　6＿店の外に飛び出し、販売。元気な声が響く　7＿若者だけでなく、大人も会場に元気と笑顔を届けた　8＿今年も迫力ある義農太鼓が披露された　9＿行燈。夜空に麦の穂が幻想的に映し出された

Interview

義農祭には毎年参加
作兵衛ウルトラクイズで優勝した

（写真左から）
古川栄子さん　＝筒井＝
安居優花ちゃん ＝筒井＝

今年は土曜日だったから来ている人も多いし、いつもよりいろいろなイベントがあって「どんな風になるのかな」とわくわくしました。

義農祭に初めて来た

（写真左から）
井口桃子さん　＝北中３年＝
村田汐里さん　＝北中３年＝

平日は授業があるので、今まで参加することができませんでした。初めて参加して、お店を巡ったり行燈を作ったりしましたが、楽しかったです。

祭りの変化を生んだ原動力

未来を担う子どもたちのチカラ

中高生の提案から始まった

麦のブースや夜の行燈で、例年とは一味違った義農祭―。この変化のきっかけは、昨年度に行われた「作兵衛子供会議」での2つの提案でした。

町内の中学生と伊予高等学校・伊予農業高等学校の学生を対象に行われた同会議。全6回の会議に、42人が参加しました。

会議では、最初に町の現状を理解するため、課題や魅力を書き出し。次に、その課題を改善し、強みを伸ばしていくため、自分たちができることを協議しました。

そして、実行に向けて具体的な内容を話し合い、事業案10案をまとめたのです。そのうち、2案が義農祭に関するものでした。

義農祭を変えたい

事業案では、義農祭の問題点として「形骸化が進んでいる」「若い世代、北伊予・岡田地区の参加が少ない」といった意見が出されました。そして、「町を活性化させたい」「一大イベントにしたい」という思いを込め、さまざまなイベント案が提案されました（具体的な提案は下記を参照）。

作兵衛子供会議の様子。子どもたちが主体となって、町のために自分たちができることを話し合い、事業案をまとめ、行政などに提案した。

義農祭に関する提案

麦味噌活性化プロジェクト

義農祭で高校生が麦味噌づくしのブースを作るなど、麦味噌を広める。また、開催時間を遅めたり、中高生の吹奏楽を取り入れるなど舞台発表を毎回変えたりして、誰もが参加できる町の一大イベントとする。

義農祭の活性化プロジェクト

行燈を利用して前夜祭を開催。さらに、若い世代の地産地消を促すため、特産の裸麦とイチゴを使ったタルトの商品開発を行って販売することで、義農祭、そして松前町の活性化を目指す。

義農祭の活性化プロジェクト提案メンバー

山内真広さん＝伊予高３年＝

Interview

アクシデントがあっても みんなであきらめず協力できた

今まで、自分たちが企画したものを実行するという機会はなかったので、いい経験になりました。行燈では、雨や強風のアクシデントもありましたが、多くの人が率先して協力してくれて、ありがたかったです。

課題は宣伝について…。もう少し宣伝ができていればよかったと思います。

祭り当日、行燈の準備をする山内さんたち

提案が町を動かす

子どもたちの提案を受け、町は義農祭の内容を検討。提案のあった行燈、中高生の吹奏楽や麦のブースを取り入れ、例年とは違った形で義農祭を行うことを決めました。さらに、クイズや群読などで、義農作兵衛について理解を深めてもらうためのイベントを加えて行うことにしました。

準備・運営でも子どもたちが活躍

そして、義農祭が近づいた4月中旬。学業や部活などで限られた時間の中、会議に参加した子どもたちが再び動き始めます。約千個の行燈作りや、麦のブースの運営など、各所で活躍しました。

未来の担い手が生んだ変化

「中高生が多い」「夜までするの」義農祭の変化の裏には、町の未来を担う子どもたちのチカラが隠されていたのです。

でも、それだけではありません。次のページでは、変化に欠かせなかった、もう一つのチカラについて紹介します。

麦味噌活性化プロジェクト提案メンバー

河野想路さん＝伊予高２年＝

Interview

多くの人で一つのものをつくる 楽しさが分かった

一から自分たちでつくるという機会はなかなかないので、企画から準備をして祭りに参加するという、いい経験ができました。

また、今回を通して感じたのは、たくさんの人がいてこそ、知恵が出るということです。多くの人と工夫をして、一つのものをつくる楽しさが分かりました。

祭り当日、麦味噌の PR を行う河野さんたち

祭りの前から多くの中高生が協力。当日は雨や風の影響を受けながらも、結束して行燈を完成させた。

子供会議での思いをつなぐ 共感する者のチカラ

麦味噌活性化プロジェクト提案メンバーの河野さんが「たくさんの人がいてこそ、知恵が出る」と話しているように、子供会議のメンバーに共感し、行動した多くの人たちがいます。手を差し伸べ、一緒に行動する人がいたからこそ、イベントは、より深みのある、にぎわいのあるものになったのです。

雨ニモマケズ、風ニモマケズ

「楽しそうだったから」「先輩たちが考えたものだから」

子供会議の案に共感した町内の中学生と伊予高等学校・伊予農業高等学校の学生の有志も、祭りの変化に欠かせませんでした。麦のブースでの販売や行燈の制作、点灯などを子供会議のメンバーと行って祭りを盛り上げました。

この他にも、義農作兵衛の「人を思いやる姿」を重ね合わせて行った「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」の群読に参加した小学生や、松前中学校のブラスバンド部も、「やりたい」と自ら手を挙げて参加し、祭りに花を添えました。

このチカラは、強い絆を生みます。祭り当日は、雨に、風に、最悪の天候―。行燈に火を灯せば雨が降り、行燈を立てれば風で吹き飛ばされ―。それでも、子どもたちは、雨に打たれ風に吹かれながら、行燈を立てる向きを変え、石を使って風を防ぐなど、自分たちで工夫して行燈を完成させました。まさに、雨ニモマケズ、風ニモマケズ、結束したチカラが成功を生んだのです。

吹き飛ばされた行燈

◀来た人がおみそ汁を笑顔でもらってくれて、「おいしい」と言ってくれました。興味があったけれど行ったことがなく、参加したいと思った「義農祭」。楽しかったです。
（写真左上から、羽藤愛さん、矢吹穏さん、神田真那さん、大西怜菜さん、福山詩織さん。岡田中学校）

▲いつもは見る側だったので、実際に出演すると緊張しました。作兵衛さんのようにみんなが心優しい人になったらいいな。
（写真右、遠富羽琉ちゃん。松前小学校）

▲子どもたちが主になって、みそ汁の試食、商品の販売まで、とても頑張ってくれました。義農祭で皆さんに喜んでいただける地域貢献ができてよかったです。
（義農味噌㈱。子供会議で、麦味噌に関する提案を直に聞き、初めてブースを出店した）

町のにぎわいはみんなでつくる

義農祭では、紹介した子どもたちだけでなく、今まで出展していた大人も、初めて祭りに関わった大人も、祭りの成功に向け、協力し合っていました。

このように町のにぎわいは、「行政」「子どもたちや大人」「団体や企業」それぞれがバラバラに進めていたのでは、生まれません。

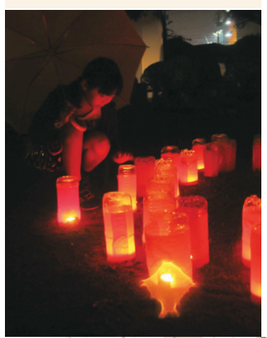
それぞれが協力し合い、実現に向けて一緒に実行に移していくことが、にぎわいを生むことになるのです。

これは義農祭だけに限るものではありません。みんなで協力し合い、もっともっと町ににぎわいをつくっていきましょう。

特集「義農祭」終わり

子どもたちが活躍した麦のブースでの売り上げは、町の熊本地震義援金に寄付されました。

▼先輩たちが考えたものだし、夜もするのがいいなと思って行燈作りに参加しました。いつもより祭りが楽しみです。
（写真左から会川聖哉さん、濱田愛莉さん、今岡由羅さん、中本恋花さん。松前中学校）



義農作兵衛の優しい心を伝えようと作られている「義農まんじゅう」

◀小さい頃から義農作兵衛の話を聞いていると、人のために行動する気持ちが育ちます。関わる私も、一緒に明るい気持ちになっています。今後も優しい心を守り育てていきたい。
（写真右、義農まんじゅうの会の山田貞子さん。毎年義農祭に出店しているほか、学校現場でまんじゅうを伝授している）